

【第四〇回大会シンポジウム ユーラシアと日本列島 世界の中のアイヌ叙事詩】

アイヌ叙事詩における英雄像

奥田 統己

はじめに

アイヌの英雄叙事詩については、知里真志保（一九五三―四）ほかによる「部落連合の総指揮者」という英雄像、そして主人公側の連合である「ヤウンクル」が海の向こうの敵「レブンクル」と戦い、「共通の敵に対する団結を通して、同族意識を高揚し、自覚」とするというテーマの理解が広く知られてきた。しかし、とくに一九七〇年代以降に記録・報告されるようになった北海道各地（旭川、釧路、静内など）の英雄叙事詩では、「部落連合」は語られず主人公はむしろ「孤独な英雄」である。また金田一京助、知里真志保らがおもに扱っていた北海道西南部（沙流、胆振）においても、実は少なからぬ英雄叙事詩の主人公は孤独であり、描かれる戦いは「ヤウンクル対レブンクル」ではない（奥田、二〇〇五）。

知里（一九五三―四）の説はおそらく、当時の研究状況のなかで、アイヌを超えた叙事詩一般の成立論のなかにアイヌの英雄

叙事詩を置くことを企図したものであったろう。今やすでに知里のユーカラ成立論自体は実証的な検証に耐えなくなつたといつてよいが、新たな資料的基盤を共有したうえで「世界の中のアイヌ叙事詩」という問題意識自体は、成立論であれ類型論であれ、いまでもなく重要な意味を持ちつつづけている。

正直なところ奥田は、アイヌと他文化の叙事詩とを対比しての成立論や類型論について、新たな仮説と称するに足る見通しをいまだに得ていない。そこで本シンポジウムの発題者としては、荻原（二〇一一）を始めとする各パネラーの研究を念頭に置き、また事前にパネラーが直接集まつて行つた打ち合わせの内容を踏まえつつ、アイヌ叙事詩の「英雄像」にかんするデータを提示することで、他の民族との対比に関する具体的で的を絞つた議論の手がかりとしたい。

一・親との関係

一・一・孤児である

すでに（金田一、一九三二）は、アイヌ英雄叙事詩の主人公に共通する英雄像が「孤児」であることだと述べている。英雄が孤児であることは、ユーラシアをはじめとする他地域・他文化の叙事詩にもしばしばみられる特徴である。親の世代と主人公との関係の設定はさまざまであり、親の存在は問題にならない（虎杖丸）（金田一、一九三二）など）ことも、親の敵討ちが戦いの目的であ

る「ユカラ1」（静内町教育委員会、一九九一）ことも、すでに昇天した親と戦う「ユカラ2」（静内町教育委員会、一九九一）こともある。

一・二・天孫／貴種である

国造神の落とし子であるアイヌラツクル（「カムイオイナ」（金成、金田一、一九六二）、人間と狼の女神のあいだの子であるポイヤウンペ（「余市姫」（金成、金田一、一九六二））天の神々と兄弟／いとこであるトゥンプオルンクル（「ユカラ1」（静内町教育委員会編、一九九一）、天地に通じる全能性を持つポンオタストウンクル（「天上での血の雨が降る戦いの物語」（北海道教育委員会編、一九九五）など。明示されなくても、神々と同様の死にかた（魂が西方に飛ぶ）などで暗示される。ただし一・一・で見たとおり、英雄叙事詩において親との関係はすでに失われている。

天神の子孫である主人公は、英雄叙事詩以外のジャンルにも登場する。例1は「カオリ」という折り節（リフレイン）を伴って語られる神謡である。

例1 「二人の明神の神話」（田村、一九八四）

（ポロシリの神の奥方が物語る）自分はポロシリの神の妻であつたが、夫が石狩の水源を治める神の娘のところへ通つてい

出て和人の国に暮らしていた。ところが私はすでに妊娠しており、やがて一人で男児を産んだ。男児が成長して若者になると「あなたはポロシリの尊い神の息子である。あなたがこの和人の国に生えている栗の木の実を背負つて陸へ戻り、私の両親であるアヨロの神のところへも、またピラウトウルの神のところへも、栗の実をまき、そして父のところへ行きなさい」と教えた。

（ポロシリの神の息子が物語る）母の教えのとおりアヨロとピラウトウルに行くと、神々は私の成長を喜んでくれた。私は栗の実をそれぞれの土地にまいてからピラウトウルの神に連れられて山の頂上にある父神の家に行った。父神は「自分が悪かったのだ、私はもう役目が終わったので明日昇天する、あとは息子が継ぐのだ」と言つて泣き、私を抱きしめた。次の日父が昇天したので、私はあとを継いでポロシリを守ろうと心に決めた。

このようにアイヌの物語のさまざまなジャンルを見渡せば、天孫であること自体は避けられるべきことではない。そして神謡あるいは散文説話では、神である親との関係が明示され、親の後継ぎになったり親の援助を得て危機を脱して成功する（幸福・名声・地位などを得る）主人公がしばしば語られる。にもかかわらず英雄叙事詩の主人公の場合は孤児としての生い立ちがほぼ必須であり、親との関係が意識されるのはもっぱら戦いの動機づけとなる場合である。つまり天神の子である物語上の必要性に乏しいようにみえる。

二. 出生・成長

異常出生・異常成長は、孤児としての生い立ちそのものを別にすれば、アイヌ英雄叙事詩では顕著ではない。物心がついてからの幼児期の段階的な成長ぶり、やがて戦いや求婚などに出かけることができる年齢になることはしばしば丁寧に描写される。

戦いは英雄に成長をもたらず、英雄に対する周囲の態度・扱いは何度戦いを重ねても変わらない。このように「英雄の成長と自立」というテーマを拒否している作品の一例が、金田一京助によって早くに紹介された「虎杖丸の曲」である（金田一、一九三三）。この物語のなかでは、戦いを終えて帰宅した英雄は、もとのとおり寝床につき育ての兄姉は弟の行動に気づかない。あるいは英雄が育ての兄姉とともに戦い、虚病姫という「敵中の花嫁」を得て凱旋したのちも、山獵に出かけようとすると育ての姉になだめられるので、刀で脅して無理やり支度をさせる。つまり妻帯しても周囲に自立を認められず、自己の意思を暴力的・自己中心的に実現する幼さは変わらない。物語の後半では育ての兄姉に代わって虚病姫が英雄の援助者となるが、戦いの終わりに援助者が「自分の村に帰る」ことを提案し、英雄がそれを聞かずに次の戦いを目指すという関係そのものは、育ての兄姉とのそれから変わっていない。

英雄が誤った行動を取るのには悪者に誤った認識を植えつけられている（術をかけられている）から（「Yukar」（二））（ニタイ

パカイエ、中川・遠藤、二〇一六、「ユカラ¹³」（静内町教育委員会編、一九九二）など）であり、その行動が改まるのは術が解けるからであって本人の能力の成長を意味しない。英雄は物語全体を通じて子供っぽく自己中心的である（「虎杖丸」「ニタイパカイエ」）場合もあれば、物語の冒頭から全智全能で冷静沈着な場合もある（「天上での血の雨が降る戦いの物語」）。

例2 「Yukar」（二）（ニタイパカイエ、中川・遠藤、二〇一六）

（ボーイヤウンベが物語る）私はお爺さんに育てられていた。お爺さんの言いつけで私がトゥムンチカムイの加勢をしに戦場に行くと、サンプトウンクルに、行方不明の甥ボーイヤウンベを兄にあたるカムヨトブシとチウセレスといっしょに探している、お前がそうではないかと言われ、腹を立ててサンプトウンクルを殺し、カムヨトブシたちと戦い始めた。するとアイヌラックルが自分を捕まえて家に連れて行き、その妹に私の世話をするように言った。私がアイヌラックルの妹に切り掛かると、私は地下の湿った国に連れて行かれ、そこでトゥムンチの神に「谷地坊主になりたいか、立木になりたいか」と問われる。私は涙を流して後悔し、トゥムンチの神に教えられたとおり育てのお爺さん（ニタイパカイエ）を殺して、兄たちとシスタブカに帰る。アイヌラックルの妹を怒らせたことを気に病む私はある夜彼女の家に行き、朝まで寝床をとにする。アイヌラックルの妹は私をなじるが、私が彼女の許婚者となった雷神と戦うこと

になると、魔法の扇によって私を勝利に導いてくれ、私は彼女を妻として暮らす。兄たちが先祖の祭壇を再建するために呼んだ客のなかにサンプトウンクルもいて、私は魔払いの儀礼として彼に額を割られ、気が休まった。

例3 「天上での血の雨が降る戦いの物語」(北海道教育委員会

編、一九九五)

(ボンオタストウンクルが物語る) 私はオタスツの村に暮らしていた。あるとき、天上に悪者がいて神々をみな殺しているという噂が聞こえてきた。私の家で働いていた若者たちが悪者退治に天に昇って行ったが、皆殺しにされたらしく天から血の雨が降ってきた。そこで私は宝物のなから土で作った舟と土で作った若者を出し天に昇って行った。すると私を育てていたおばさんと私の妹も「私たちもいっしょに連れて行ってくれ。」と言った。(ボンオタストウンクルの妹が物語る) おばさんは私に宝物の扇を持たせて天上に連れて行ってくれた。(ボンオタストウンクルが物語る) 天上では土で作った若者たちが舟を漕ぎながら戦っている。私の刀はひとりでに舟の外に飛び出して悪者の手下たちを斬っている。おばさんと妹が宝物の扇をおおぐと、悪者たちは風に飛ばされていった。いっぽう私が悪者の家のなかをのぞいてみると悪者は鎧を着たまま寝ていた。みると小便をするための穴だけが空いていたのでそこから刀を刺して悪者を倒すことができた。戦いが終わって天上から降りてくる途中で、どういふわけか金銀のうろこのつ

いた大木の枝に私たちの舟がくっついてしまった。それは殺された神々の因縁だということがわかったので、言葉をかけて刀をふる枝を切り離して、私たちは村に戻ってきた。それからお祝いのしたくをして、親戚をみんな呼び集め凱旋の報告をした。そして私の妹はイヨチびとの息子の嫁にやり、イヨチの娘を私の嫁にもらうことにした。

いっぽう神謡や散文説話の主人公である人間は、さまざまな体験を経て成長し、その対価として幸福、名声、領土(集落、宝物などを獲得する。すでに児島(二〇一〇、二頁)は散文説話の「社会的機能」として次のような指摘を行っているが、「虎杖丸」のような英雄叙事詩の関心は英雄一代かぎりの冒険にあり、散文説話のように個人、家系、集落が成長する過程を描くことにはない。

「北海道の西南地域(道南)でウエベケレと呼ばれる散文の物語がありますが、それは、本来は娯楽や文学的創造の意義とは異なる社会的機能を持っていたのではないか」

「ウエベケレという名称で本来言われるものには、コタンの歴史を語ったウエベケレが非常にたくさんあります。親族関係とか、集団どうしの関係ですとか、コタンの盛衰―消滅して、再興した、人がたくさん集まってきて」

「家系の歴史や始祖を語るといふのは、散文説話の機能の一つとしてあります。」

三．結婚

（姿を消している）親の代からの許嫁との結婚（「耳輪の曲」、（金成、金田一、一九六七）など）、敵の妹との結婚（「虎杖丸」など）はいずれもしばしば語られる。しかしどちらの場合も、集落・領土の継承権の獲得はテーマにならない。敵の女性が結婚相手になるのは、その村を滅ぼすか、少なくとも戦いの視野の外に置かれる場合であり、新たな村を支配したり同盟相手としたりするのではない。子孫の繁栄も語られないことが多く、この点でもアイヌの英雄叙事詩は「民族的」とは言い難い。

いっぽう神謡・散文説話では、結婚が意味するのは集落どうしの同盟・通婚関係や、異類婚の結果としての神の庇護の保証であり、どちらの場合もそうして新たに成立した一族の歴史を子孫に語り伝えることが重要な意味を持つ。

英雄叙事詩の結末では、それまでの物語の展開に関係のない集落・地域との婚姻関係が突然語られることがあるが、描写は定型的で物語の展開とはあまり関係がないようにみえる（例3など）。こういう描写を含め、中川（二〇一六）は鍋沢元蔵氏が記録した三編の英雄叙事詩に描かれる集落どうしの結婚関係を分析し、政略結婚による同盟関係の変化が表現されているのではないかという解釈を示した。この解釈そのものは興味深いが、それが成立するためには、複数の英雄叙事詩がいわば年代記のような一貫した

世界観を共有していること、およびそのなかで中川（二〇一六）が想定したのと同じ時系列で物語が並んでいると了解されていること、が前提でなければならない。しかしこれらの鍋沢氏によるテキストを含めアイヌの英雄叙事詩のなかに、物語群を年代記として解釈するための手がかりがどれだけあるかは明らかでない。大団円での唐突な婚姻関係の提示をどう理解するかは、アイヌの英雄叙事詩の解釈にとってなお課題である。

例4 「虎杖丸」（金田一、一九三二）

序曲 生立ちの巻

（シヌタプカでの暮らし）

第一戦記 石狩の巻 黄金のラツコ戦乱の因となる事

（イシカラのラツコを獲得してシヌタプカに帰る。兄たちに怒られる。）

第二戦記 オマンベシカの巻 異国に父の代の故習のあるを知る事

（イシカラから攻められる。オマンベシカとの同盟。シヌタプカに帰って寝る。）

第三戦記 酒宴の巻 シヌタプカの諸英雄毒刃に斃れ虎杖丸始めて威霊を顕はす事

（神と先祖の祭り。オマンベシカ、イヨチ、ルベットム、サンブツ、ルウェサニからの来客。シララベツ人とカネベツ人の来襲。虎杖丸の霊力によってようやく相打ちになる。）

第四戦記 カネサンタの巻 ウカムベシカ女虚病の事

(ウカンベシカ人の妹の虚病が露見したのでカネサンタに救出に行き、シスタブカに連れ帰る。)

第五戦記 禿頭の巻 出猟して虚病姫を奪ふ大敵に逢ふこと

(獵に出かけて留守のあいだに虚病姫を誘拐した禿頭のチワシベツ人を倒す。)

第六戦記 チワシベツの巻 チワシベツに虎杖丸再び威霊を顯す事

(チワシベツの村を滅ぼし、メナシサム of 村の評判を聞く。)

第七戦記 メナシサム of 巻 老婆に化けて変怪の憑依の真似を演ずる事

(メナシサム of 村に行き、ボンモシリ、チュブカ、レブンシリ、シララベツ、カネベツ、カネサンタ、ウカンベシカ of 各首領を、オマンベシカ人の助けを得て倒す。その場で休む。)

第八戦記 アツイサラ媛 of 巻 虚病媛再び英雄の危難を救ふ事
(アトウイサラ of 兄妹を倒す。ペストウル of 女を虚病姫 of 助力で倒し、ペストウル of 村に敵意を抱く。)

四・超人性・装束など

超人的な能力や、エキゾチックな装束・呪具は英雄叙事詩に特有のモチーフだといつてよい。神謡・散文説話 of 主人公である人間は、たとえ神の子孫であることが明示される場合でも、

(アイヌラックル・ボンオタストウンクルなどのいわゆる人文神を別とすれば) 超人性を持たない。

英雄 of 装束は大陸との関係を示唆するとされる(児島、一九八九)が、常套句には日本語からの借用語が含まれる。

例5 主人公 of 武器を描写する常套句(「ユカラ2」)(静内町教

育委員会、一九九一)

ウルキスマツ	かみ合う留めひもが	コキッコサス	カチツと鳴る
チキリウンルケブ	足につける防具を	アチキリコユブ	私は足に結わえつ
テクウンルケブ	手につける防具を	アテクコユブ	ける 私は手に結わえつ
カムイイベタム	神 of 太刀を	アンクッポケチウ	私は帯の下に差す
カムイボンカサ	神 of 小さい笠	アンノッコユブ	あごに締めつけ

まとめ

確かにアイヌ of 英雄叙事詩にはユーラシア of 叙事詩と似たところがあるだろう。しかし以上にみたような出自 of 扱い、指導者としての資質 of 描写、復讐や結婚 of 意味づけなどの点では、アイヌ of 英雄叙事詩 of 英雄像は「孤独」であり、成長、自立、幸福、名声、領土、財産などの獲得 of 投影に乏しいと解釈することができ。こうした特徴は、ユーラシア of 英雄像 of なかでどのような位置を占めているだろうか。

なお奥田（二〇〇五）が述べた「孤独な英雄」の特徴は、登場人物の味方が許嫁と家族と神である援助者だけである、つまり「人間関係が孤独」なことだけであった。ここで整理したのは、より広い範囲の英雄像に当てはまる「目的・使命が孤独」であるという特徴である。

もちろんここで述べているのはいわば「程度」の問題であり、アイヌ英雄叙事詩の描写のなかに成長、幸福、承認欲求などを読み取ることが不可能ではない。しかし英雄叙事詩の語り手たちの多くは同時に神謡や散文説話をも語ることができた。本稿が主張しているのは個別の作品の個人的な解釈ではなく、アイヌ口頭文芸全体のなかに英雄叙事詩の主人公を位置づけたときにも相対的に読みとることのできる諸特徴である。

参考文献

萩原眞子（二〇一）『英雄は幼な子』—英雄叙事詩における神話について—、『説話・伝承学』19。

奥田統己（二〇〇五）『歴史研究とアイヌ口承文芸（一）（二）』、

本田優子（編）『シンポジウム&公開講座報告集『アイヌ文化研究の今』1「アイヌの歴史と物語世界」、札幌大学ペリフェリア・文化学研究所（本田優子（編）（二〇一〇）『札幌大学付属総合研究所研究叢書1 伝承から探るアイヌの歴史』、札幌大学付属総合研究所に所収。

金成マツ・金田一京助（一九六二）『アイヌ叙事詩ユーカラ集

2『三省堂』

金成マツ・金田一京助（一九六四）『アイヌ叙事詩ユーカラ集

4『三省堂』

金成マツ・金田一京助（一九六七）『アイヌ叙事詩ユーカラ集

7『三省堂』

金田一京助（一九三二）『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』、東洋文庫（「ユーカラ概説」「虎杖丸」として『金田一京助全集』第8／9巻、三省堂に所収。

児島恭子（一九八九）『18、19世紀におけるカラフトの住民—サンタンをめぐる—』、北方言語・文化研究会（編）『民族接触—北の視点から』、六興出版

児島恭子（二〇一〇）『散文説話の社会的機能』、本田優子編『伝承から探るアイヌの歴史』、札幌大学付属総合研究所

静内町教育委員会（編）（一九九二）『静内地方の伝承（I）—

織田ステノの口承文芸（I）—。

静内町教育委員会（編）（一九九四）『静内地方の伝承（IV）—

織田ステノの口承文芸（4）—。

知里真志保（一九五三）『ユーカラの人々とその生活』、『歴史家』二二三（知里真志保著作集 第3巻、一九七三、平凡社に所収。

中川裕（二〇一六）『国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵ノートの分析』、中川裕・遠藤志保（編）『国立民族学博物館調査報告』134。

北海道教育委員会（編）（一九九五）『八重九郎の伝承3』。

早稲田大学語学教育研究所（一九八四）『アイヌ語音声資料1』。

（おくだ・おさみ／札幌学院大学）